

## 概念形成論史の中の「具体的普遍」

木本周平(首都大学東京)

本発表は概念形成をめぐる 19～20 世紀初頭のドイツ哲学における議論において、理念的な役割を果たしたと思われる「具体的普遍」という考えの実態、およびその実装を探る。この考えはヘーゲルに由来する思弁的な奇想と思われがちだが、カッシーラーの科学哲学的な概念論を強く導いたアイディアの一つであるというのが、本発表が検討の対象として提示するヴィジョンである。

概念がそもそも何であるのかについて満足な回答を与えることは難しい。しかし概念が知的活動の様々なレベルにおいて働いていると我々が現にみなしていることは前提にしてよい事実である(この知的な活動の主体は主に人間であるが、もちろん動物や人工知能などもそこに含まれてよい)。さらに、概念は知的活動の中で新たに形成・訂正・改定の対象となり、あるいは自分以外のものに伝授・教授されるといった流動的な過程をたどるものであるということも概ね認められるだろう。犬に関する一切の知的な活動を欠いていた主体が何らかのプロセスを経て、犬についての概念的な活動が可能になるということはおそらくありふれている。また個人の見聞に基づく学習の範囲を越えた知識を、理論的な学習によって獲得することもまた我々が通常な事である。このような概念の動的な形成過程は①どのようなメカニズムをもつのか、および②概念はどのようなものとして形成されるべきであるのか、というのが概念形成論の主要な主題である。

近世以降の経験論的な前提から概念形成が論じられる際に通常想定されるのは、この①の問題である。知覚上に現れる表象をインプットとし、そこからの何らかの形成過程によるアウトプットとして概念を理解する点で、経験論的な議論は一貫している。知覚をベースとした概念形成論は、認知科学を前提とする現代においても、支配的な潮流であると言える。しばしばロックに帰せられる概念の「抽象」説は、知覚に現れる共通のメルクマールを抽出して一般観念が取り出されるとする。これは①に関する素朴な説明モデルの典型である。ロックおよびそれに類する説明が抱える困難(その代表的なものは、メルクマールの共通性の認識自体が既に概念を前提しているというものである)から様々な代替説が登場する。しかしここではそれらを単純化して概念の抽象説として一括する。

カッシーラーの概念形成論は、このような抽象説に対する一連の批判的な議論の結実の一つである。カッシーラーの考察の対象は多岐にわたっており、科学者の理論的実践、人類学的な素材を基にした文化哲学、晩年の知覚の哲学がそこに含まれる。このような多様な領域において、カッシーラーは首尾一貫して②の問題を扱っている。それは実証的な知覚心理学に取材している場合においてすら、貫徹されている。彼の関心は、諸々の概念獲得が知的主体の活動を可能にしているのだとすれば、それはどのように構造化されているであろうか、というものであった。概念の抽象説に対する批判は、このような関心に基づいている。すなわち、批判の理由は、抽象理論が概念形成メカニズムの説明モデルとして不首尾であるとみなされることによるのではない。むしろ、仮に抽象過程の結果として普遍概念が形成されたとして、その産物である抽象的な普遍概念は我々の知的活動の実践に全く即していない、というのがその批判の眼目である。カッシーラーの抽象概念批判には、このようなプラグマティス的な側面がある。

概念を抽象の産物と考えることによる弊害の一つは、概念内容が共通性質を含むだけの抽象的なものになってしまうことである。素朴な抽象説によれば、我々が概念を獲得するのは知覚に現れる表象の多様

性から共通の性質を抽出し、かつ、それ以外の非共通性を捨象してしまうことによる。したがって、このモデルのもとでは、形成プロセスを経るごとに概念に含まれる内容は乏しくなる。抽象モデルが提示する概念像では、抽象される当の内容は抽象以前に見出されているのだから、それを獲得するメリットが全くないのである。

カッシーラーの議論は、その多くが論理学や数学などの現実の学問実践に取材したものであり、科学哲学的な側面が色濃い。しかし彼のヴィジョンは実は哲学的な概念論の特殊な伝統に根ざしたものである。Jeremy Heis はその一連の仕事を通じて、この歴史的連続性を明らかにすることを試みている。Heis によれば、カッシーラーに至るこの歴史的な伝統における最重要人物はヘルマン・ロッツェである。実際、『実体概念と関数概念』の冒頭におけるカッシーラーの抽象概念批判の骨子はそのままとロッツェの『論理学』(2 版)に認められる。両者の共通性は批判的な主張ばかりではない。カッシーラーの概念＝関数モデルという積極的な主張もまた、その原型をロッツェのうちにもつのである(Heis がロッツェに注目するのは、フレーゲの関数理論への影響関係を探るといふ、初期分析哲学史研究上の動機もある)。

ロッツェからカッシーラーへ受け渡された概念モデルの特徴は、経験論的な伝統と真向から対立する。彼らによれば、上位の普遍概念は下位の特殊概念を統制するという役割を担う。仮に「ラクダ」を「コブのある草食の動物」と捉えたとしよう。このとき「コブがある」と「草食」とがラクダが共有する特徴である。これらはラクダが共通にもつ無数に多くの特徴の中の二つでしかないが、にもかかわらず、とりわけこの二つの特徴が取り上げられるとすれば、それが動物の比較に関する有意な特徴づけだからである。何が有意な特徴であるのかは「ラクダ」だけでは確定されず、より広い実践的文脈を必要とする。この例では「動物」はたとえば分類活動のような実践的文脈と結びつき、何が動物間で比較されるべき特徴であるのかを設定する役割を担う。この意味で、下位概念の把握は上位概念の把握に服している。上位概念は単なる抽象物ではなく、「理論」に等しい意味をもつことになる。上位概念が変更を受ければ下位概念がもつ有意な特徴づけも変化する。上の例で言えば、ラクダの形態的な特徴づけがもはや有効ではないということもある。

カッシーラーは特殊を統制する普遍概念を「具体的普遍」と呼ぶ。これはもちろんヘーゲルに由来する悪名高い術語である。経験論的な伝統は、具体的なものは個体であり、普遍的な概念はそこからの抽象による産物と考えるのだから、「具体的普遍」とはまさに矛盾を内に含む言い回しにほかならない。「具体的普遍」に対するロッツェによる自覚的言及はないが、カッシーラーにとって自らの概念形成論はこのような伝統に基づくものであった。

本発表では、以上のようなロッツェおよびカッシーラーによる概念論をヘーゲル的な「具体的普遍」をより一般化したものの一例として提示し、その妥当性を検討することを試みる。両者の接続は Heis による 19 世紀論理学史ならびに前分析哲学史の研究を補完するという意味をもつ。またこの試みは Beiser らによる最近の新カント派研究の流行にとっても有意義なものとなるだろう。そして最後に、この試みは単に概念史を記述するにとどまらず、ヘーゲル的な普遍概念を合理化するという側面があることを指摘したい。普遍概念に優位性を置くことは、しばしば具体的な個物を概念から導出する「悪しき観念論」の典型だと批判されてきた。もちろんこれは特定の概念観を投影した誤解にほかならない。実践にもとづく知識理論をその実装として示すことは、このような誤解の解消になるだろう。